

## 四万十町文化的施設基本計画

### 目次（案）

#### <凡例>

黒字：既存部分

青字：前回確認部分

赤字：今回追記部分

黄色：事務局コメント部分

はじめに

### 第1章 四万十町における文化的施設の基本方針

私たちはいまや21世紀を生きており、世界レベルで大きな変化が目覚ましい時代に身を置いています。特に20世紀後半に始まったデジタル化の波は、いまや社会のいたるところに及んでおり、私たちの生活に大小さまざまな影響を与えています。

この認識に立ち、これからのデジタル情報社会の未来像を常に意識し想定しながら、文化的施設の整備を進めていきます。特に第5期科学技術基本計画で目指すべき未来社会の姿として提唱された「Society5.0」（サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society））が決して絵空事ではないと考え、常に半歩先の未来を見据えて、歩みを進めていきます。

#### 1. 文化的施設の役割

##### （ア）意義と理念

文化的施設をいまあえて整備するのは、21世紀初頭を生きる四万十町民による50年後、100年後の町民に引き継ぐ地域の財産づくりであるからです。私たち四万十町民は各地域において先人が遺してきてくれた自然、文化、歴史、そして人々という大きな財産に拠って立ち、いまがあります。

時代の先行きが見通しにくいのは実はいつの時代も同様であり、人口減少や高齢化が叫ばれる現在だけが特別なわけではありません。現在を特別視せず、先人同様目先の困難ばかりに目を奪われず、いまを生きる町民の活動に力を与え、その活動が育む未来を生み出していくために、いま文化的施設を設けます。過去からの財産を受け継ぎ、その財産に学びながら、同時に現在を豊かなものにする努力を惜しまず、その先につながる未来をよりいっそう豊かにするために、この文化的施設が必要です。

そして、文化的施設がこのような意義や理念を実現していくためには、以下の4つの役割を現実のものとして実現していく努力が求められます。

（イ）具体的な4つの役割－「あれか、これか」ではなく「あれも、これも」を貪欲に実現

1 ヒトとまちをつなぐ、コミュニティの場

文化的施設は、図書館と美術館の機能を核とする施設ですが、ここに 3 つ目の要素としてコミュニティ機能を追加し、図書館、美術館、コミュニティの 3 要素が有機的に融合する場所を目指します。特に美術館については従来の静寂な展示・鑑賞型のスタイルから役割を広げ、対話型の展示・鑑賞からひいては制作・滞在の環境までを視野に入れます。

2 子どもたちが自分の居場所を見つけられる場

文化的施設は、四万十町で生まれ育つ子どもたちが地域の大人に包み込まれ守られつつ、同時に一人ひとりの子どもが独立した存在として敬われ、自分の時間と空間を持てる場所、さらに多様な社会と接点を持てる場所を目指します。

3 最新の情報と技術を活用した多様な文化・芸術体験の場

文化的施設は、四万十町の地理的制約に関係なく、常に最新の情報と技術にふれて刺激を受けながら、新たな情報と技術を生み出し、地域間格差を感じない多様性に富む体験を味わえる場所を目指します。この役割を実現することは、地域においてデジタル情報社会を生きていくための広いリテラシーとスキルを育むものでもあることを意識します。

4 想像／創造体験を通じた自己表現の場

文化的施設は、いまは世の中に存在しないモノやコトであっても、それを自由かつ大胆に想像し、現実の世界に創造していくことを通して、一人ひとりが自己表現を追求できる場所を目指します。

以上の 4 つの役割は、「あれか、これか」という比較に基づく優先順位にとらわれのではなく、「あれも、これも」一緒に実現していく役割であるということに大事にします。

(ウ) 上位・関連計画との関係

以下の 3 つの上位計画・関連計画との連続性・一貫性を常に意識し、これらの計画に変更が生じた際は、本計画も随時見直しを行っていきます。

1 「第 2 次四万十町総合振興計画」

2 「四万十町まちづくり計画」

3 「四万十町市街地再生基本構想」

4 「四万十町教育振興基本計画」(改定版)

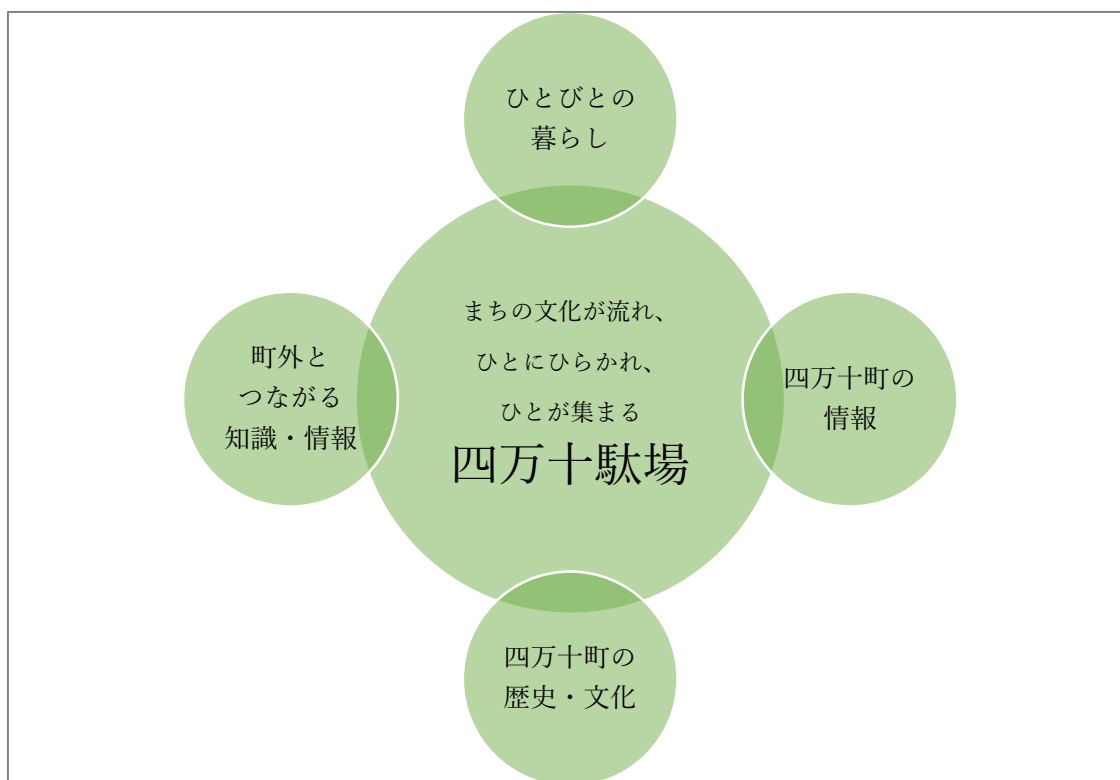
2. 新しい文化的施設のビジョン

「まちの文化が流れ、ひとにひらかれ、ひとが集まる四万十駄場」

四万十川の豊かな自然に育まれた四万十町らしい文化は、四万十川の流れのように常に変わらず流れ、このまちに暮らす人々に受け継がれ、まちを巡っていきます。「駄場」とはひらけた土地のことを表しますが、現在では、人が自然と集まり交流する場

所の意味合いでも使われています。四万十町の新しい文化的施設も同様に、様々なストーリーをもつ人々が融合し、入り混じっていくような場となっていくイメージを込めて、ビジョンを定めました。

四万十町の文化を四万十川の流れにたとえ、常に新しい知識や情報が滞ることなく流れ、人々の生活に浸透し、世代を超えて文化が循環していくことをイメージしています。これまでの四万十町の文化を守りながら、これからの四万十町の文化を生み出す場として、本来あるべき駄場のようにまちとひとにひらかれた施設となり、様々な情報が集まり、情報を発信していく場となることを目指します。この施設があることによって、四万十町の風土を受け継ぎ、四万十町に集う一人ひとりの生活が豊かになるビジョンを描いていきます。



### 3. ビジョンにつながるコンセプト（ミッション）

「人・自然・文化 ～やわらかい社会をつくる～」(基本構想からの転載)

これは、四万十町が掲げる町の将来像「山・川・海 自然が 人が元気で 四万十町」に、文化的施設が応えていくものとして整理しました。文化的施設が四万十町の人と自然、文化をつなぎあわせることで、四万十町で暮らす子どもからお年寄りまで町民の誰もが、まち全体とつながり、生き生きと活動・活躍できる場となっていくサイクルを生み出していきます。

人・自然・文化のそれぞれにつながっていくように、これまでの四万十町立図書館と

美術館が果たしてきた役割を整理しながら、これからのあり方を発展させていきます。これまで四万十町立図書館が役割を果たしてきた読書支援、学習支援、調査研究、地域資料や郷土資料の保存といった伝統的図書館の要素をさらに充実・強化し、同時にこれからの新しい文化的施設のなかでは、新しい要素として、創造、交流、活用へと発展させていきます。これは窪川・大正・十和といった四万十町のまち全体だけに留まらず、四万十町の外に向けても創造、交流、活用の機会を創出していくことを目指します。四万十町の人と自然・文化を通して新しいものを作り出し、自己表現の活動を促進し、これまで気がついていなかったひとの魅力、まちの魅力に気がつき発信する役割を担っていきます。地域に眠っている郷土資料を活用し、資料と人々がつながる取り組みを積極的に行っていきます。

四万十町立美術館は、美術館本来の役割として、展示作品を楽しみ、味わい、ふれるといった一方向でのみの環境を提供してきました。これからの新しい文化的施設のなかでは、交流と創造といった活動を通して双方向に美術（アート）とふれあい、多くの人とわかちあい、かさねあうような要素を取り入れていきます。施設ができてからも持続する活動プログラムとして、地域資料や郷土資料を題材にするなど、町民参加で地域と向き合うアートの実践を整備計画段階から行っていきます。こうしたプログラムの積み重ねによって地域がひらかれ、やわらかい社会をつくることにつながっていきます。

文化的施設は、図書や美術（アート）を入り口に、郷土資料や音楽、演劇といった多様な芸術・文化的要素を子どもからお年寄りまで誰もが気軽に取り入れられるよう、柔軟性と可変性を備えた町民の創造活動を支える施設を目指します。まちのアトリエとして機能し、新しい交流や創造の場を創出しながら、世代を超えた町民同士のつながりや町外とのつながりをつくりだしていきます。

「人が元気で」の言葉どおり、この施設に集う人々が想像や交流を通して、まちのひとや自然、文化とつながり、自分らしく生き生きとした生活を過ごしていく場を目指していきます。そのために、文化的施設はやわらかな社会参画の場となり、人々の生活の豊かさにつながるようなプログラムを提供していきます。具体的なプログラムとしては、人々の知りたいという問いに応え、思いに寄り添いながら、一緒に調べていくサービス（レファレンスサービス）などの充実を検討していきます。

#### 4. コンセプト実現のためのアクションプラン

##### (ア) 図書館、美術館、コミュニティを核とする文化機能の融合

図書館、美術館、コミュニティの3つの機能の融合を図ります。そのために既存の図書館や美術館のあり方に敬意を払いつつ、同時に現在や未来において求められる新たな機能の開発や導入も重視します。

具体的には、読書、調査、研究、表現、創造、交流といった多面的な活動が個別に行われるのではなく、同じ時間・空間のなかに常に同居する融合を図ります。

これは四万十町の歴史や文化、芸術や郷土、そして自然をむやみに区別せず、地域資源として一体的に扱うことを意味します。また、図書館における資料、美術館における作品、博物館における文化財という区分にとらわれることなく、可能な限り一体的な地域資源としてとらえます。

このような融合的な取り組みは四万十町を次世代へと正確に伝えていくためには欠かせないものであり、この融合が実現しなければ、過去から続く現在の四万十町を未来へとつないでいくことは実現しません。

(イ) 広域なまち全体にひらかれ、各地域をつなぐ

新しい文化的施設は、その施設内だけに閉じたものとはしません。まち全体に開かれ、四万十町の各地域（窪川、大正、十和）をつないでいく機能を内包します。具体的には、①大正分館の機能強化と連携、②十和分館、ないしは分室の開設と連携を行います。また、連携にあたっては情報技術の活用により、各図書館・分館・分室にそれぞれ所蔵されている資料の在架確認や取り寄せをスマートフォン等での簡易な操作により実現します。さらに今後の普及が予測されるドローン等を用いた配送の実現も目指します。

このような連携は図書館施設に留まるものではなく、町内のさまざまな文化施設や類似機関との連携を順次実現していきます。特に窪川に設置する文化的施設においては岩本寺や旧都築邸半平、お遍路道等、町の重要な場所と連携する手法を検討します。並行して町内各所に点在する空き家や空き店舗の活用促進を図り、これらの空き施設を利用して新たに誕生する諸施設との連携を実現していきます。なお、これらの連携の実現に向けて、「四万十町まちづくり計画」や「四万十町市街地再生基本構想」との密な連携を図ります。

(ウ) 施設をともに支えるサポーターの存在

文化的施設を中長期的に持続可能なものとしていくために、施設の整備段階と運営段階の両面において、町民との協働、町民間の互助・共助、サポーター団体の設立と運営に取り組みます。この取り組みにあたっては、先行事例の研究が常に必要であり、引き続き各地の事例の研究に町民一体となって努めていきます。

同時にすでに町民有志による文化的施設の整備を促進する活動が展開されていることを鑑み、行政機関として文化的施設の整備・運営に責任を有する四万十町と、文化的施設を支え、使う四万十町民がイコールパートナーとなるサポーター制度を整備します。

(エ) 実空間と情報空間をつなぐ情報システム

文化的施設自体、また文化的施設と連携する諸施設・機能には、Society5.0 を見据えた情報システムを積極的に導入します。この方針は地方都市である四万十町においてこそ都市部以上に有効であり、四万十町に暮らす人々が地理的条件を格差やハンデキャップとしないために欠かすことはできません。

特に実際に私たちが物理的に存在する実空間とインターネットやスマートフォンに象徴される情報空間をつなぎあわせる情報システムを構築していきます。具体的にはたとえばスマートフォンのような携帯型・装着型等のデジタルデバイスの徹底的な活用によって、文化的施設のサービスを可能な限り利用できる環境の構築に努めます。

また同時にデジタル情報社会におけるデジタルデバイスとの適切な距離感やバランスのとれた使い方を常に振り返ります（例：デジタルデトックス）。

## 第2章 四万十町文化的施設の利用体験ストーリー

### 1. 世代

- (ア) 乳幼児と子育て世代
- (イ) 小学生・中学生
- (ウ) 高校生・大学生
- (エ) 実働世代
- (オ) 高齢者世代

### 2. 地域

- (ア) 窪川地域
- (イ) 大正地域
- (ウ) 十和地域

### 3. 関係

- (ア) 働く人（福祉、図書館、議員、商店主、経営者、行政職員、農業・林業等）
- (イ) 暮らす人
- (ウ) 訪れる人

「20XX年、この施設をあなたはどのように使いますか？」

※それぞれの人々が、文化的施設をどのように使っているのかを想像しまとめる

### 第3章 四万十町文化的施設のサービス目標・管理運営

#### 1. 文化的施設のサービス目標

##### (ア) 核となるサービス目標

来館者数だけを追わない目標設定、町民満足度の重視、量的評価と質的評価のバランスへの配慮

四万十町らしい文化目標

文化活動の度合いを目安として評価する目標設定、四万十町らしい文化活動に魅せられる町民や町外者からの評価の重視

新たな文化活動の発生や進展、文化活動に参画する町民の満足度の評価、直接的には参画しない町民の誇らしさの重視

情報技術リテラシーの涵養目標

伝統を尊重しつつ、新しい技術とその活用可能性や利用に潜む危険性についての見識ある態度の涵養

##### (イ) 施設間連携によるサービス目標

文化的施設は、四万十町における広い意味での文化に関わる諸機能・諸施設との機能面での連携・連動を重視し、例外を設けずあらゆる方面・観点での連携・連動を実現する努力をする。

町内の既存の文化・教育施設との連携方法の検討

文化施設間の連携

幼保施設、小中高との連携

四万十町立の幼稚園・保育園や小中学校の学校図書館、図工室等、さらには町内にある県立高校の学校図書館との連携を図る。特に後述する協働体制での実施を前提に、これらの諸施設への資料等の配送や研修機会の一本化を実現する。実現に際しては、等しく四万十町の幼保・教育施設であることを鑑み、人員配置等による格差を生まないように最大限の努力を図る（研修機会の充実等）。

福祉施設、病院との連携

団体貸出の適用、宅配便、認知症予防

商店、喫茶店等との連携

団体貸出の適用、店舗紹介の情報提供サービス、利用者カードによる優待の可能性

観光施設、宿泊施設、道の駅との連携

団体貸出の適用、観光情報サービスの提供

##### (ウ) アウトリーチによるサービス目標

窪川・大正・十和をつなぐユニバーサルサービス

協働による個別配送の実現に向けた検討、実用化を強く意識したドローンによる



配送の研究、3 地域をつなぐ遠隔会議システムの導入検討

## 2. 図書館と美術館が融合する文化的施設の望ましい管理運営方針

### (ア)開館・閉館

文化的施設では図書館・美術館といった機能区分に関わらず、開館・閉館の日時を共通化する。これにより複数の機能がただ同居するだけの雑居的な複合施設ではなく、集合する機能が融合する施設を目指す。設計にあたっては、このような運用が可能な施設形態を重視する。

### (イ)資料の貸出~~・返却~~位置づけ

図書資料、美術資料、歴史資料の一体的な扱いという位置づけ

図書資料

貸出上限の撤廃、貸出期間の決定

美術資料

「見せる・魅せる」展示の充実、「観る」にとどまらない、「鑑賞」の実現（「対話型鑑賞」）、引き出して「つくる」を育む

歴史資料

一定の範囲での展示の実現と関係施設とのつながりの明示と誘導

### (ウ)作品~~（資料）~~の展示・閲覧

### (エ)資料の保管・管理

## 3. 想定する立地とまち全体とのつながり

## 4. 想定する諸室仕様

## 5. 町民との協働による施設運営のあり方・スケジュール

## 6. 専門職員（司書、学芸員、その他）の育成・研修のあり方、スケジュール

町民と協働する四万十町らしい文化的施設の職員体制の検討

研修機会の設定、自主研修の制度的支援

## 7. 管理運営のあり方

町民と協働する四万十町らしい文化的施設の運営方針~~サービス計画~~の検討

直営体制と委託体制（指定管理を含む）の比較検討

直営体制のメリットとデメリット、その解決策

委託体制のメリットとデメリット、その解決策

## 8. 人材確保・雇用方針のあり方、~~今後の整備手法と~~スケジュール

計画と設計の並行実施による整備の質向上

対話型設計プロポーザルの実施方針（まちとのつながりを意識した提案の募集）

町民との協働に基づく四万十町らしい文化的施設のサービス計画の策定手順

町民と協働する四万十町らしい文化的施設の職員体制の検討

## 第4章 四万十町文化的施設の建設計画・スケジュール

1. 文化的施設の位置と規模  
(ア) 中心市街地活性化を促すまちづくりを考慮した文化的施設の立地の検討
2. まちにひらかれた計画・設計の実現
3. 施設に必要な機能とあり方
4. 施設整備スケジュール